

# 平和の道

## 卷頭の言葉



平和、それは守るものではなくして、創造するものであり、与えられるものではなくして、みずから努力によつて築きあげられるものです。また外なる形のみのものでもなく、内なる心の中のみのものでもなく、先ず心の奥底より確立され、そこから外へ向つて具現されて来るものなのです。

従来、世間一般の平和者は、平和を外なる形の上のみに求めて、内なる心の平和を忘れがちでした。その結果、平和を求めながらも努力すればするほど却つて、平和のためと称する修羅斗争へ堕ち入っていました。また一方、心の中にのみ平和を求める宗教者は、世間より逃避して心の中に閉じこもり、ために世間から遊離してしまつて、宗教本来の使命を喪失していました。

この時、日蓮大聖人の立正安國の大獅子吼が爆発したのです。立正安國の主張と実践こそは、平和を求めるすべての人々が改めて学ばねばならない大白道なのです。

# 鷲峰 8月号 目次

第2卷・第8号・通巻14号

卷頭の言葉 平和の道 ..... 1

平和の宝塔 ..... 木村義賢 3

握手と合掌 ..... 川島本良 15

出家の動機

我が入信と 改宗の記 ..... 吉松白庵 17

編集後記 ..... 34

表紙題字・身延山法主藤井日静猊下

表紙写真・インド靈鷲山へ渡る身延山金剛の  
釈尊像

表紙印刷・大阪東洋印刷社々長

藤原秀憲氏寄進

# 塔の和平



身延山大学三年

賢義 村木

人類史上、はじめて原爆が投下されたのは、昭和二十年八月六日の広島と、つぐく同九日の長崎でした。八月の月は、この原爆記念日から更に十五日の終戦記念日とつなぎます。

私たちは、いや全世界の人々は、永遠にこの深刻なる記念日を忘れることがあってはなりません。そして心から戦争を懺悔すると共に、幾百万・幾千万の戦争犠牲者の靈を慰め、二度と地上に戦争の起らないよう、固い決意を一層あらためしなければなりません。

ところが世界の状態をみれば、終戦後、間もなく勃発した朝鮮戦争、キューバーの紛争、近くは南ベトナム・キプロス等々、

核戦争の導火線を内包した局地戦争が、隨所に誘発している現状であります。

何か大事な、最も大事なものが欠けているのではないかでしょうか。

また日本国内においても、毎年開かれる原水爆禁止世界平和大会でさえ、被爆者の悲しみも外に、やれ社会党だの、やれ共産党だの、やれ自民党だと、政党色に分断され、本来、素朴な平和の祈りの集いであるべきはすの大会が、最近では米ソ対立の場から、中ソ対立の場ともなり、金字連をもふくめて平和・平和と唱え争う思想対立の場と変貌してしまっており。

「一体、誰のための平和なのか！」

と訴えずにはおれなくなるような現状であります。

## 2

私も、この夏休み中、身延山学生布教隊の一員として、北陸、関西、九州方面へと展開された衝頭布教に参加させて頂きましたが、この長期各地の布教中、私が一番目についたのは、主な都市には必ずといってよいほど、平和の塔とか、戦争犠牲者の慰靈塔が建てられていたことでした。

然し、誠に残念に思つたことは、塔のあたりには人影も少く、詣てる人もなく、草のみがおよい繁つて、手入れもされていないということでした。

原水爆禁止大会をはじめ各種の平和大会が開かることは、決して無意味なものといふのではありませんが、然し、そこには遺族をはじめ全市民の祈りをこめて建てら

れたはずの平和の塔も懲靈塔も、今では一部の人を除いては、殆ど過去の遺物としてしか顯りみられなくなっているもののように有様でした。

或る所では、子供たちの屈強な遊び場となり、少年雑誌やテレビでおぼえたのでしょ、無心に戦争ゴッコやチャンバラや、ギヤングゴッコをしている数名の少年たちの姿が見うけたのも皮肉なことでした。然し、それは子供たちの罪ではなく、平和を願う祈りを忘れた大人たちの罪にほかならないのです。

時の流れと共に太平にならされて、戦争の残酷さを忘失する時、曾って切実なものであつたはずの平和に対する願いも、祈りの心も、共に忘れ去られて、平和塔も懲靈塔も、單なるセメントや石のかたまりにす

ぎなくなってしまうのです。

祈りなき平和というものがあるはずはありません。祈りという樊付けのない平和運動は、所詮篤念の遊戯か、さもなくば思想の対立をかもすばかりです。

いみじくも本年七月の世界宗教者平和会議の席上で、次の一条が確認されました。「心の内なる平和と、心の外なる平和とは密接不可分である」と。

心の中なる絶対平和の境、これを現美社会に実現すべく、あらゆる苦難にも屈せず強力に運動を推進したのは、世界宗教史上たゞ一人とうだわれた日蓮大聖人でした。今よりおよそ七百年前、ようやく末法禪

く承久の乱といふ下剋上、王道は墨道と代り、弱肉強食、同族あいはむ自界叛逆、天変地妖、飢餓、疫病、殺戮死は後をたず、加うるに国外からは蒙古大襲来とい

う未曾有の困難が迫っていた時代、平和を求むる者は、遠く俗塵を離れて独り観念観法にふれるか、或は現世を歎離して来世往生を欣求するといったような有様でした。この時、日蓮大聖人たゞ一人、街頭に立つて立正安國の大旗をかゞげ、汝、早く信仰の寸心を改めて

速かに実業の一善に帰せよ

然れば則ち三界はみな仏国なり

十方は悉く宝土なり

宝土、何ぞやぶれんや

と獅子吼し、煩惱具足の人間を離れて成

仏はなく、三界火宅の濁世を離れて淨土はないという、人間の尊嚴と三界仏國の実相を喝破し、人間開頭、國土開頭の大運動を展開したのでした。

大聖人は三十二歳の建長五年の春から、六十一歳の弘安五年の秋に至るまで三十年間、その伝道において、國家を諫言すること二度にも及ひました。

このため却つて、死罪にも及はんとする大小幾多の法難迫害は続出しました。人類史上、稀にみる破亂万丈の生涯は、こうして繰られて行つたのです。

然し大聖人は、怒濤のようにおしよせる法難迫害のさなかにあっても、なお心中、搖くことなき毅然たる平和の境をたもつておられました。

いな、ひとたび見出した久遠本仏の仏界

は、如何なる風波に対しても、磐石の如く  
厳然としていたのです。

久遠本仏の仏界とは、本仏釈尊を中心す  
る久遠の淨土、お題目の光明に輝く不滅の  
仏國土でした。

凡夫は如何に顛倒していても、本仏の誓  
願に変りはありません。身は、たとえ破れ  
ても、本仏の淨土に破れることはあります  
。身は、たとえ滅しても本仏の淨土に滅  
することはありません。三界は、たとえ火  
宅の焰に燃えさかっていても、本仏の淨土  
は我此土安穩の寂光土であつたのです。

大聖人の心は、常にこの久遠の淨土に住  
していました。されば、たびかさなる幾多  
の法難の中にあっても、むしろ迫害を加え  
る人々をこそあわれみて

鳥と蟲とは鳴けども声おちず

日蓮は泣かねども涙ひまなし  
と仰せられたのです。

敵にも涙する大聖人の心、その心こそ本  
仏釈尊の不滅の光明に輝いていたのです。

私たちは、大聖人の全生涯を色々な勇壯  
なる大絵巻を讀嘆することもさることながら、  
そうした強力な運動のあらわれて来る  
根底に、敵をもいつくしむ大慈悲心、即ち  
本仏釈尊を中心とした大マンダラ仏界の嚴  
然としていたことに、深く心を留めねばな  
りません。

「日蓮が慈悲、曠大なれば・・・」

と仰せられたその大慈悲も、その不自惜  
身命の大活動も、美は、心中ゆるきなく本  
仏の仏界より流出したものであったという  
ことを、大聖人の受難の歴史の中に三恩す  
る時、現代における私たちの平和運動の在

り方も、おのずから明かとなつて来るであ  
りましょう。

#### 4

大聖人の生涯を語る時、忘れてはならな  
いことは蒙古襲来という困難です。この困  
難と大聖人の生涯は、切っても切り離すこ  
とは出来ません。

ところで大聖人は、あの蒙古の襲来を、  
一体どのように受け取っていたでしょか。  
大聖人の困難に対する態度を通して、現代  
原水爆の危機におのゝく人類の、宿難に対  
する私たちの態度も、おのずから決せられ  
る大いなるものがありましょう。

明治以降、日本は軍国主義へ突っ走つて  
行きました。明治の排仏毀釈を通り抜けた  
日蓮門下もまた、軍国主義の時代の波に流

され、大聖人までも国家主義者に祭りあげ  
て來ました。そして主客問答形式で綴られ  
た立正安國論の中の、

「まず國家を祈りて須く仏法を立つべし」  
といふ客者の迷語を以つて、直ちに主者  
大聖人の精神であるかのように取りあやま  
り、ますます大聖人の宗旨は、国家仏教の  
色調を濃くして來たのです。

終戦後、軍国主義が払拭されて民主主義  
が讃歎されると共に、何時しか日蓮門下の  
内にも国家主義の色彩は消えて行きました  
然し、それでも今日なお日蓮門下の中では  
「蒙古を調伏したのは日蓮聖人である」

という考え方を捨て切れず、最近、売り出  
された「あゝ日蓮」というレコードの中に  
も、あたかも大聖人が蒙古を調伏したかの  
ように歌いあげている始末です。

なるほど大聖人は、早くから蒙古の襲来

屋の中で、ひたすら両民族の覺醒を得ちに

を予言していました。然しそれは、敵国降伏

待ち、祈りに祈りつけられたのでした。

伏のためではなく、法華經にめざめない日

弘安三年十二月にあらわされた諫曉八幡

本国民を覺醒させるためであつたのです。

鈔の中でも大聖人みずから、

文永十一年四月八日、三度目の國家諫曉

も空しく、翌る五月十一日、諫倉を發って

悉くこれ日違一人の苦なり

白雲深く身延山中へ分け入られましたが、

と仰せられているほどです。

それは蒙古の襲来が眼前に迫っているため

こうした大聖人にしてどうして 敵国降伏、蒙古諫伏といったような敵対行為があ

最早これ以上、諫曉をする暇もなければこ

りえましよう。

そ、同じ本仏釈尊の仏子でありながら日本

人と蒙古人とが國をあげて戦いあわねばな

らぬ宿業を、我れと我が身に背負つて、仏

天に懺悔するほかはなかつた大聖人にとって、最後に残された唯一の道であつたので

す。

されば身延在山九ヶ年間における大聖人

を祈つたという事蹟はなく、むしろ避ける

は、二箇四面の御草率とは名ばかりの掛小

ことの出来ない蒙古軍の本土侵略によつて

日本民族が、大聖人の諫曉に覺醒すること

を待機された文章が横溢しているほどです

大聖人は、今日の門下並流者の、考える

ような国家主義者ではなく、久遠本仏の効

使上行菩薩の再誕として、常に世界的立場に立っておられたのでした。

大聖人は、みずから、

「日蓮は、いざれも宗の元祖にもあらず、また末葉にも当らず」

と仰せられていくように、一宗一派の大聖人ではなく、また民族、国家の場に立つ日本人としての大聖人のみでもなく、実に末法万年の全人類の場に立つ大聖人であったのです。

大聖人が至念された平和とは、法華経が全世界に宣布されることによって実現されるものであり、法華経の靈山虚空会上において顯現した大マンダラの仏界を、そのまゝ全世界の地上隅々にまで実現することであつたのでした。

## 5

今日、日本国のある所に、平和の塔とか懸靈塔とか、種々の宝塔が建立されていますが、大聖人の信仰からすれば、色々な宝塔の中でも、靈山虚空會上に顯現した宝塔にすぎることはありません。その宝塔とは、久遠の本仏教導が常住此説法されるいるお題目の宝塔であります。

曹洞宗の道元禪師ですらも、その著「正

法眼藏」の中で、

「法華の功德をこうぶらざれば、余經あるべからず。余經みな法華に帰投してまつらんことをまつなり」

と明言されていますが、すべての宗教は法華経の功德によつて、はじめてその価値をあらわすのです。

このことは、宝塔についても同様にいり

ことが出来ましょ。平和塔にしても慰靈塔にしても、法華經の宝塔として開会されこそはじめて真義を得るのであります。でなければ、その宝塔も何時しか生命を失い、過去の遺物にすぎなくなってしまうであります。まして信仰の裏付けのない宝塔は言うまでもありません。

然し、こゝで日蓮宗徒として反省しなければならないことがあります。それは寺院教会の門前に建てられているお題目の、宝塔に対する宗徒の態度です。

今日この宝塔は、最早、信仰の対象ではなくなり、その寺院、教会が日蓮宗であるという目じるしとか、看板ぐらいにしか考えられないようになっています。

いやしくもお題目の宝塔とは、法華經の靈山虚空会上、本仏釈尊を中心とする大マ

ンダラ仮界を、本仏釈尊の因行果徳の一法において象徴されたはすのものであります。如何に寺院が形範化したとはいえ、この宝塔を礼拝せずにいるということは、既に宗徒の中に、お題目の宝塔、いわゆる大マンダラ仮界が信じられなくなっている証拠と申されます。

心に仏界なくして、どうして社会に仏界を創造することが出来ましょか。仏界を別にして平和はありません。

眞に平和を願い、その象徴の宝塔を建立しようとするならば、その塔こそ本仏釈尊のお題目の宝塔でなければなりません。

この宝塔を中心として、いまだ法華經を信じない人が建立する平和塔とか慰靈塔といふ、すべての塔を開会統一し、人心と一緒に平和を願うことが出来るのです。

日蓮宗寺院教会の門前に建てられているお題目の宝塔を、単なる目じるしか看板とみなしてはなりません。そしてこの宝塔こそ、慰靈平和の塔に勝る宝塔とし、宗徒の信仰対境としてあがめねばなりません。

若し、この宝塔を別にして平和塔とか遺靈塔を求むる宗徒があるとすれば、それは法華經信仰を知らない者に等しいと申されましょ。

平和実現の責任は、日蓮門下にあります。日蓮門下こそ至上の平和道を護っているはずであるからです。

先ず私たちの心の中の宝塔を、再確認いたしましょ。そして一切開会の宝塔を、私たちの住む町や村に建立しましょ。信仰なき人々も、その宝塔を仰ぐことによ

て、信仰にめざめて行くことありますようから。併に「心の内なる宝塔と、心の外なる宝塔とは、密接不可分である」のです。

法華經々典の第二十章には、常不輕菩薩の故事が説かれていますが、日蓮大聖人は「日蓮は不輕菩薩のあとを繼承す」と、みずから申されている通り、不輕菩薩の菩薩行を讃嘆されました。大聖人の上行菩薩の再誕という自覚は、実は常不輕菩薩の菩薩行を、みずから実践することによって修証されたものであったのです。

では不輕菩薩は、どういう行をされたかというと、彼は道ゆくすべての人々を合掌礼拝し、それをもって無上の行としたので

あります。

彼は人々を礼拝しながら申しました。

我深敬汝等

我れ深く汝等を敬う

不敢輕慢

あえて輕慢せず

所以者何

所以はいかん

汝等皆行菩薩道

汝等みな菩薩道を行じて

當得作仏

まさに作仏することを得べし

大聖人は「顯仏未來記」の中で、

「彼の（漢文）二十四字と、この（題目）五字と、その語、異なるといえども、その意（ここに）これ同じ」

と仰せられているほどですが、不輕菩薩

は、こう言いながら、すべての人々を敬い合掌礼拝したのにもかゝわらず、却つて惡口難言され、石や杖で打たれ、終生、同情も讀嘆も、誰一人からさえ得られなかつたのです。

然し人は認めなくとも天は知つていました。不輕菩薩は臨終の後那、天より讀嘆をうけ、遂に未来世において仏陀となることが出来たのでした。その仏陀とは、ほからぬ祇迦平尼仏であったのです。

私たちは、この不輕菩薩の物語の中に、現代における平和への道を見出すことが出来ます。

平和とは、心で如何に願つても、傍観してみては、おとずれるものではあります。まこと平和を願うならば、不輕菩薩の如く身を挺してその運動の火中に飛び込む

むことです。心の中に打ち建てたお題目の宝塔を、いまだ法華經を信じていない人々

の心の中に伝え建てるのです。

これには大きな抵抗があります。抵抗は迫害となつてあらわれて来ます。然し不輕菩薩は終生、たゞ一人の協賛者さえないまゝ、なお敵をも讃嘆し礼拝し通しました。不輕菩薩のあとを繼承された日蓮大聖人は、懸口する人々に対して懸口し返すこと、はしませんでした。石や杖をもつて打つ人々に対して打ち返すことはたゞの一度もしませんでした。刃をもつて斬られようとした時でさえ、泰然としてお題目を唱えつゝけられたのです。

如何なる抵抗にも迫害にも、ゆるぐことなき心の宝塔、その信仰の力こそかたくなる人々の心さえ遂に動かすことが出来

るのです。

7

#### 物質文明、機械文明に人間性を喪失しよ

うとする現代、そして原水爆の危機におののき、まことの平和の道をも発見出来ず、平和・平和と唱えながら、却つて争いを深めている今日、不輕菩薩一日蓮大聖人をして私たちと続く本化の人々が立たなくて、どうして世界を救うことが出来ましょう。既成教団の形範の中から、三千年來の脉々たる狹義の法華經の生命をよみがえらせたとえ如何なる抵抗があり、冷笑罵倒、迫害があろうとも、使命に向つて立たねばなりません。使命とは如来の仏勅です。

岸田國士が次のように述べています。  
「一人では何も出来ない。が、誰かと先ずはじめなければならない」

(おわり)

# 握手と合掌

身延山大学三年

川島本良

それは六日の広島、九日の長崎の原爆の日もすぎた八月十一日の朝のことでした。

身延山大学高校が夏休みの休暇体験に入

って以来、直ちに展開して来た北陸三県、並に関西方面の街頭布教について、はるばる九州まで西下し、炎暑二週間の長期にわたる夏期布教日程も無事に終了して、や

との思いで、懐しい身延山への帰途につくべく長崎本線の佐賀駅プラット・ホームで、上り急行列車を待っていました。待ち時間は、およそ三十分。ホームでは急行より先きた到着する普通列車の乗客たちが、街頭布教の姿をした私たちを、物珍らしげに遠目に見守っていました。

間もなく普通列車がホームに入りました。ホームは乗る客や、降る客で雜踏しました。停車時間は四・五分くらいでしたが、その雜踏の中で、一人のキリスト教の牧師があわただしく私たちのそばによつて来て、話しかけました。

「アナタタチハ、ドチラカラデスカ?」  
「身延山です。日蓮宗龜本山身延の学生です」

「カトリックのローマ法王のようなもの

クシタチガ手ヲアワセテ立チアガラネバナ  
リマセン。シツカリヤリマショウ」

です」

「オオ、ワカリマス。アナタタチハ、ソコ  
ノガクセイサンデスネ」

「そうです」

「夏休ミハアリマゼンカ?」

「夏休みだから、こうして出かけて来てい  
るのです」

「修行ノタメデスカ?」

「勿論それもあります。然し、それよりも  
世界の平和を祈つて歩いているのです」

「オオ! 世界平和ノタメニ . . .  
個人の修行は、その中になります」

牧師は、青い目をみはりました。

「ワタクシハ長崎ノ牧師テス。原爆記念日  
ハ大ヘン悲シイサワギデシタ。コレカラノ  
平和ハ宗教ニヨルホカハアリマセン。ワタ

牧師は力強い言葉と共に、逞しい手をグ  
ツと差し出して握手を求めました。この時

学生の一人が申しました。

「仏教徒の最高の礼義は、人間を合掌礼拝  
するのです。仏陀をあがめるように . . .」

「私たち一勢に合掌し、牧師に向ってお  
題目を三唱しました。牧師も一旦差し出  
した手を引き込んで合掌しました。

発車のベルがなり出しました。牧師は列

車に乗りました。私たちは太鼓をうつて牧  
師を見送りました。列車が動き出しました。  
牧師は窓ぎわに立って、合掌したまゝ幾度  
も幾度もおじきしていました。ほゝえむ牧  
師の目は、一層青く澄んでいるようでした。

(一了)

# 出家の動機 我が入信と 改宗の記

## その1

このささやかな手記を

今は亡き父の靈前に捧ぐ

吉松白耀

私が生れて始めて法華經信仰の偉大さに打たれたのは、私が高校一年生の時のことでした。

その体験は、私の人生を一変せしめたほどのものであって、これから述べようとする此の手記の本旨でもあります。それにさきだって、先ず私の生き立ちを、簡単ながら述べてみるといたしましょう。

私の家は、もともと禪宗の一権家でした。ところが母の実家が、日蓮宗の信仰の強い家であったため、母の法華經信仰も根深く、その感化によつて吉松家も、後日、遂に一家をあげて日蓮宗に改宗し、まず次男の正員（まさかず）兄さんが出家し、次いで父自身までも、それまでの在家の職を投

げ打って、日蓮宗の僧侶として出家してしまったほどでした。

時に、父は四十三歳の中年でしたが。その後、私たち兄弟は、全部で九人いましたが、その中、私も入れて四人までも出家しています。

これによつても母の信仰が、如何に強盛であり、また私たち一家の信仰が、日蓮宗に改宗して以来、如何に信仰一筋に燃え沸ついたかが想像されましょう。

ところが、正員兄さんが出家して間もなく

、宗教界における理想と現実、その甚しい矛盾と相觸り、そしてそれより起つて来る僧道の行きすまりに堪えかねたのでしうる通りに遡つて身延山中に死に場所を求め、ここで自殺を計つてしまつたのです。

おそらく正員兄さんとしては、身延の大

聖人のそばで死にたかったのでしよう。死をもつて大聖人に、現代僧道の行きすぎりを訴えたかったのでしよう。死んで大聖人のおそばへ行くほか安心立命の道も見出さすことの出来なかつた正員兄さん・・・。その胸中、何と痛ましいことだったでしよう。

自殺の方法は、アドルムによるものであつたのですが、幸か不幸か、意識不明に落ち入つた死の寸前、身延の町の人に発見され、直ちに病院へかつぎこまれて、一命をとりとめました。

然し、たとえ一命をとりとめたとはいえるこの出来事が、父母をはじめ私たち一家に大ショックを与えないわけはありません。父は、

「まことに日蓮宗に対しても身延山に対しても、何と言つてよいか、申証もないこと

になってしまった。父親としても、このままで日蓮宗に籍をおいておくわけには行かない

てしまった父にとって、進むべき、ギリギリの処置であつたのです。

「さりとて還俗してしまっては、出家する時、仏祖三宝に対して立てた誓願にそむくことになってしまう。進退きわまつた。一

体どうすれば良いのか」と悩み果ててしましました。

最早、日蓮宗に法籍をおくことは出来ずそれでも出家として法華經を宣布しようとする以上、その解決の道は、転宗のほかはありません。

（たとえ所属する宗派は異っても、弘める我が子が僧侶として自殺を計ったという罪の意識の方が重大であつたのでした。またその一面には、

日蓮聖人の法華經には変りはない）

という強い確信のあつたことは事実です中年で出家した父は、いくばくもなくして再び新しい出発を始めました。私たち家族の者も、また同様でした。

然し、一家の此の再出発は、内親の自殺と御縁がありました。父は、それを契機に家族もろとも意を決して本門法華宗へ転宗しました。

当時、一命を取りとめた正員兄さんは、それは、転宗以外に生きる道もなくなつ

まいましたが、当時の父の転宗は、決して日蓮宗にそむいたのではなく、日蓮宗に対しても、身延山に対しても、むしろ敢くま

いすれにして、信仰に関して、あまりにも潔癖であり、一徹であったと申せましょ

うか。

でも忠実であるうとする、純粹すぎるほど

の信仰が、理由の如何を問わず、出家した

我が子の、自殺しようとした、しかも總本

山の靈山身延で、という痛しき不祥事によ

ることに思い起されることは、六老僧日頂

の信仰が、理由の如何を問わず、出家した

今にして思えば、正員兄さんも在家から

出家しただけに、自殺せざるを得ないほど

宗教界の矛盾と、僧道の行きすぎまりに悩み

苦しんだのでしょう。

上人の生涯について伝えられている痛しい物語です。

日頂上人は弘安六年、鎌倉にあって他宗との法論対決のため、日蓮聖人の一周忌法要に遅参し、父なる富木日常上人より終生勧當され、ために弘法寺の法灯を弟子に譲り、身は富士山麓にかくし、かけながら兄弟子日興上人の奥学布教を助けて、生涯、

また父としても、家代々の禅宗から改宗し、更にみずから出家得度したほどだけに

その日蓮宗から本門法華宗へ転宗するには、我が子の不祥事に対して、如何に責任を感じていたことでしょう。父といい兄といい

の間には何かしら、そこに一脉あい通する

ものがあるようだ感ぜられはしないでしょ  
うか。

行にあけられていました。

私は、親もと遠く離れたお寺で育ちました。そしてお寺から小学校へも中学校へも通わせてもらいました。

私が、九人兄弟の末子として、福岡市の馬出町に生れたのは、昭和十四年九月二十日、あたかも永仁五年の昔、身延山の開基大橋越である波木井の領主、南部六郎実長公（後の法寂院日円上人）の御命日でもあり私の父が出家してより七年目、既に本門法華宗へ転宗した後のことでした。

それだけに家庭における宗教教育は、むしろ峻烈をきわめ、兄たちはもとより、末子の私ですら、もの心もつかない幼い頃から、判らないまゝにも、お題目を唱えさせられていました。数え年五つの昭和十八年には、既に親の膝もとを離れて、お寺の修

基はお寺のせいでなく、峻烈にまできびしくしつけられた親もとの家庭信仰によって、なれば強制的にお寺へあけられたという他律的な信仰形式の中にあって、しかも自分自身の心の内より爆発するような自主的な求道心が殆どなかつたためであります。

それにもかゝわらず、当時、幼稚で愚かであった私は、そうした自分自身の内的なものを反省することもなく、信仰の観ひも

与えてくれない周囲ばかりを鋭く批判して、或は、それが私に出来る精一杯の抵抗では、信仰のマンネリズムと寺院の形態化を

うらみ、  
うらみ、

「日蓮聖人の法華經精神は、一体どこにあるのか、以上、述べたように他律的なものに

るのだ！」

と心の内で絶叫していました。然し、さ

りとて寺院を脱出して還俗することも出来ず、周囲に圧迫されるまゝ、外に抵抗の色さえ現わすことも出来ず、たゞ環境に流されれるままに、

「坊主になるのも仕方がない」

といったような、憤慨とあきらめ、そして自己嫌惡の結緒した思いが、毎日のよう

に続いていました。

然し、それでも与えられたお寺の仕事には、むしろ積極的に働き、なまけるという

ようなことはありませんでした。

私の出家の動機は、それは恥しいことながら、以上、述べたように他律的なものに

すぎなかつたのです。

さ

ところが、こうした私の考え方を、根本的に改めるべき日がおとずれて来ました。

それは、私が高校へ入学して十六日目の、昭和三十年四月二十四日のことでした。時

間にして午後八時五十分。この時が、私の進むべき人生を一変させたのです。

この八時五十分の出来事というのは、実は私の父が、六十六年の生涯を閉じたことでした。死因は幽門癌でした。

今日なお癌は、不可抗力な不治の病いと

して人々から怖れられています。全く恐しい病気です。

父は生前、この病いにおかされるや。さながら生けるかばねでした。病床に臥してより他界するまで、およそ一ヶ月ばかりの間、食餌は一切喉を通らず、体は衰弱するばかり、死を待つことこそ楽しみといえるほど苦しみもだえ。

△これが自分の父なのか

と疑いたくなるほど、もの凄い形相をして苦しんでいました。また私は、このようない父の苦しみもだえる姿を見るにつけ、△これが、いやしくも信仰していた人の、ましてや万善同帰の法華經を、みずからも信じ、人にも布教していた聖職者の姿なのか

△もはや法華經は無用の長物、いや魔物とさえ思わしめられるほどでした。  
私どもの只今の生活、ありかえってみた日常生活の中には、懺悔しなければならない多くのものがあると思います。私の父も四十三歳にして出家する時、それなりの懺悔をもつていたことでしょう。そして爾來二十有余年の信仰生活は、反省と懺悔によって貫ぬいていたことと、思います。  
と申しますのは、一旦、法華經のこととなると、極度に厳格であり、峻烈でさえあつた父を、よく知っているからです。危険な憶測ではありますが、日々につくまる罪業は、日々の懺悔によつて消滅していはずです。その上、みずから不退転の精進と、信ずるところが一切經中、最勝とされている法華經であつてみれば、罪が消

えても不思議ではあります。

法華經の結語、觀普賢菩薩行法經の中で  
も、

一切の業障海は

みな妄想より生ず

若し懺悔せんと欲せば

端座して実相を思え

衆罪は相隨の如し

惡日よく消除す

と説かれております。またキリスト教に

おいてさえも、

「懺悔によつて、人は救われる」

と教えています。

然し、それなのに、病床にのたうつ父の

姿には、仮りにも、

「教わっている」

という片鱗すら認めるることは出来ません。

「これは一体どうしたことなのでしよう」  
「何故、父は、こんなに形相もの悪く、も  
だえ苦しまねばならないのでしょうか」

「幽門癌の苦しみ自体、本来そのようなも  
のであるにしても、信仰の力で何とか安ら  
かにならないものでしようか」

「宗教とは、本当の苦しみを体験しない者  
の、観念の遊戯にすぎないものでしようか  
マルクスのいう通り、涙の谷の聖影にすぎ  
ないものでしようか」

「信仰による救済とは、所詮、その時その  
時の御部合主義なのでしょうか」

「信仰によつてこそ、すべての人々が救わ  
れる」と説いて来た僧侶たる父自体の、今  
はの苦しむ姿を見るにつれ、信仰に対する  
私の疑惑、悔薦、憤怒、目撃の度は、ます  
ます深まって行くばかりでした。

然し、そうした疑惑にせよ悔覆にせよ、

また自嘲、憤怒にせよ、それが天にも地にも、かけがえもない唯一人の父の、閼絶する

と、はつきり予告しました。そして、「遠方の人々にも、このことを連絡するよう

うに……」

るような、死にも勝る苦しみを対象としてそこから発して来るものであるだけに、私自身としても、さすがに胸もおしつぶれるような、思いのともなうのを禁ずることは出来ませんでした。

そして、このような思いをいたきつゝ、看護の日々をすごす中、天は父を召すべくその報らせを示したようでした。

#### 4

それは四月二十一日のことでした。父は家族をはじめ徹夜で看病してくれている信徒の方々を、枕もとに呼び集めて、「私は、三日後に死ぬ」

と注意し、更に死出の旅路に着用する白衣・本衣・袈裟・珠数・白足袋にいたるまで、すべてについて詳細な指示がありました。

それらの品々は、母が白木の三方にのせて御宝前にそなえました。兄が、ほうほうにのびた父のヒゲを剃り、頭髪もきれいに剃りおろしました。

大マンダラ御本尊も、父の枕もとに掲げ臨終に対する一切の準備は整い、父が予告した二十四日を待つばかりとなりました。  
おかしな期待ですが、私は、  
△若しも、この日、父が他界しなかつたならば、もはや法華經信仰といえども、あて

にはならない。その時こそ、いさぎよく信仰をするんだ。すべてやるのだ)

と、ひそかに心に決め込んでいました。

子としては親に対して、

「一日でも半時でも、せめて一秒でも長く生きながらえて欲しい」

と頼うのが当然であるということは、百も承知しています。

然し、このような闊絶するばかりの苦しみに直面しながらも、なお法華經を信じてやまぬ父に対して、不審というよりも、むしろ怒りにも似た抵抗をいたいたからです。それは、私がお寺にあげられて以来、つもうにつもった慣年の感情が、こと此處に至って爆発しようとしたものでもあります。

らずか、なお苦しい息の中にも、繰り返し繰り返して私に申しました。

「お前は出家の道を歩め。疑ったり、怠けたり、退転してはならない。出家の道こそお前の人生にとって無上の道である。みずから修行して、広く世の人々のために、この法華經を宣布せよ。お前の生涯は、立正安國によって實ぬくがよい」

この言葉は、遂に父の私に対する最後の言葉、いわゆる遺言となってしまったのです。当時の私にしてみれば、強烈な信仰を持ちながらも、なお苦悶する父の姿に接するにつれ、ますます信仰そのものに疑いを深めていただけに、

### 一 父と同じ道を歩け！

ということは、如何に病床の親の指示であり、依頼であつたとしても、さすがに、父は、そうした私の気持を知つてか、知

卷之三

と思わずにはおられませんでした。

b

としました。最早、父の顔には苦痛の色も疲れた影もなく、血色はよく、病氣になる前の、父本来の柔軟なおもざしに輝いていたのです。

やがて父は、私に向つて、

いよいよ父みずから予告した四月二十四日・この日は朝から、親戚の人々や、信

徒の方々がつめかけていました。そして父の臨終を、

今か  
今か

と案じつゝ席も立たずに、父を見守って

いました。床によこたわった父の顔は、今

までほどではありませんか、なお拭い切れ  
ない苦痛の影がたゞよつていました。

星がすき、日が暮れ、そして午後の八時三十分、見守っていた信徒に対して、

「息子を頼む」

と合掌した父の顔を見て、私はドキリツ

と観音経を唱えているのです。私は、このことを人々に伝えました。その後、ときどきこれとぎれにお題目が聞きとれました。

「何と言つてゐるのだろう」と耳を近づけますと、父は、「……念彼觀音力……」。念彼觀音

と観音經を唱えていたのです。私は、このことを人々に伝えました。その後、ときどきそれにお題目が聞きとれました。

「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經」

と父のお題目に唱和しました。

これが臨終の唱題でした。私は父の体をさよえていました。父は坐ったままとりまく家族や信徒に向っていました。家族や信徒は父に対していました。

「これが最後のお題目か」

と思えばこそ、人々の唱題は、ひとときは高まり、高まるお題目も、さすがに悲しみにむせび、アト父の唱題がやみました。

「オヤ？」

と思って、父の顔をのぞき込みますと、つぶつた父の右の眼から、一しずくの涙が玉のように静かに頬を伝わって、口もとまで輝いていました。

私は思わず、

「お父さん」

と呼びました。然し返事はありません。

不吉な予感が背筋を走りました。私は抱いていた父の肩に手をかけ、ゆするようにもう一度、

「お父さん」

と、更に強く呼びかけました。その時、

一方に、ずしりとした重みのかゝるのを見えました。父は、私の腕の中にありました。

6

それは全く予想だに出来ないのことでした。

生前、食へては吐き、食べなくても茶褐色の悪臭をもつた液を吐きながら、悶え苦しんでいた父のことです。から

「臨終の際は、きっと、のたうちながら死ぬだろう」

と悲痛な予測をしていたのです。それは  
独り私はかりではなく、母も兄たちも信徒  
の殆どの人々までが、そう思い込んでいた  
のです。

ところが、この予想は皆完全にはずれて  
しまいました。父の臨終は、常人の遠く及  
ばない安祥とした、いかにも法華經宣布の  
聖駕者としてふさわしい臨終でした。

しかも三日も前から、おのれの死期を予  
言し、臨終の準備万端を整えしめ、いよい  
よ死期の迫るや、それまでの苦悶の影すら  
払拭（ふっしき）し、端座・合掌・唱題の  
中に入界受生の一期を閉じたのです。  
父の臨終の尊さは、私に強烈な衝動を与  
えすにはおきませんでした。

「法華經だ！」  
「信仰のおかけだ！」

私は、腕の中の父の体をしつかり抱き  
しめたまゝ、こみあげて来る感涙と共に、  
思わず、そう絶叫していました。

と、その刹那、それまでおふいからさつ  
ていた信仰に対する疑惑・嫌惡等々のすべ  
てが、悪夢のように消え去っていました。  
私の絶叫と同時に、人々の号泣が耳に入  
ってきました。然し私は、泣けませんでし  
た。私には、そうした悲しみよりも、生れ  
て始めて法華經信仰の偉大さに打たれた感  
動の方が強かったです。

へさすがは我が父・私の父は立派だった  
普通の人では堪えられぬほどの、あの苦し  
みにも堪えて、ひたすら法華經を信じ抜い  
た父・・・

へ如何なる境遇にあっても、常に、おのれ  
の信するところを、ひるがえすことなく、

示してくれた父。  
しかも臨終のまぎはに  
までも……

へ信仰なんか、いつそのこと、やめてしま  
えはよいものを・・・

「その臨終の時、身をもって、いや一死をもってしても示してくれた法華経信仰の尊

と、怒りにも似た考へをいだいていた私

さ・・それは、ほかでもない、実は迷える  
私自身のためではなかつたのか・・・

△御都合主義であったのだ△  
と気が付いて、悔いにはお

「あの偉大なる法華經信仰現象の事実、それは、その直前にまで、一月あまりも続いた

悔いても悔い切れない無間苦哭、その涙

ていた悶絶するような病氣の苦しみがあつたればこそ、一層、第三者の私たちにとつて、より強烈に印象づけられている。

は 法界に遍滿する驟大無邊なる法華經の  
そ脈々たる大生命に、始めて触れることの  
出来た感動の涙と共に、しつかり抱きしめ  
た父の体、なお生あたたかい父の頬を、ぬ  
らしていました。

の方便であつたのではあるまいか……」

と思い至った時、自分自身の今までの愚

かさ、特に臨終の一刹那に至るまで、信仰に生きぬいた父に対して

法華經の如来寿量品の中には、良医と狂子の譬えが物語られています。こゝにいう

良医とは久遠の本仏釈尊のこと、狂子とは、まっていた子供たちは、良医が、どんなに本仏釈尊の愛子でありながら、仮性を見失つて顛倒の衆生、則ち私たちのことです。

この物語によれば、父なる良医の留守中、子供たちが、あやまつて毒薬を飲んでしまいました。たちまち猛毒が発し、子供たちは悉く地にのたうちながら悶乱し始めました。

この時、家に帰つて来た良医は、我が子の悩乱の有様をみて、さっそく多くの薬の中でも、至極最上という、色香美味の良薬を調合して与えました。この良薬こそ、実は妙法蓮華經という薬であったのです。

子供たちは、悩乱しながらも、いまだ本心を失っていない者は、直ちに服用したゝめ救われることが出来ました。

然し、すみかり毒に本心まで侵されてし

まっていた子供たちは、良医が、どんないすゞめても、すゞむればすゞめるほど却つて薬を飲もうとしませんでした。

万策つきた良医は、

「ここに薬を置いておく。必ず飲むのだよ。この薬こそ、私がお前えたちに与えられる最高のものなのだ」

と言つて、お供をつれて遠く旅立ちました。そして程もなく、使いを遣わして

「貴方たちのお父さんが、遠い旅さきで急に亡くなられました。御臨終の時まで、常に口ぐせのように貴方たちのことを心配されて、

一刻も早く、あの良薬を飲んでくれるよに・・・と祈つておられました。

本当に慈悲深いお方でした。これほどの

お方は外にはおられません。然し、そのお父さんも、貴方たちの身の上ばかりを気遣われながら亡くなられたのでござります」

「と言わしめました。

本心を失つていた子供たちも、この使いの言葉を聞くや、さすがに驚き悲しみました。身も世もないほどの悲しみでした。

このことを寿量品では、次のように述べています。

「若し父いましなば  
我等を慈愍して  
能く救護せられまし  
今、我を捨てよ

遠く他国にみまかりたまいぬ  
みずからおもんみれば  
孤露にして、また恃怙なし  
こゝにいう孤露とは孤独なる草露のこと

であり、恃怙(じこ)とは頼む所のことです。

子供たちは、父なる良医が、突如旅さきて逝去したと聞き、頼りにする所を失つて全く孤独なる草露のような、はかない身であることを痛感しました。

頼るところなき孤独、それは沈退と飛躍の分岐点であり、飛躍へ赴く時、それはそのまま飛躍のスプリングとなるものです。

子供たちは、この孤独のどん底にあってはらわたをしほるばかりの思いで、父を恋慕渴仰しました。そして始めて、今は亡き父が、命として留め残しておいた良薬のあつたことに気付き、これを服用しました。

さしもの毒病は、たちまち回癒しました。そして子供たちは、悉く本心にかえり、眞の仏子として新生の第一歩をふみ出すこと

出来た、といふのです。

若し、良医の死という方便がなかつたらば、すっかり本心を失つていた子供たちは、こゝろ遂に醒悟することは出来なかつたことでしょう。

私もまた、父の死、その厳肅なる臨終を契機として、法華經の魂にめざめることが出来たのです。

私は、この日以来、信仰に対する姿勢を正しました。そこには今までのよくなじめじめした懷疑や反抗、憤怒や自嘲といったような彷徨の影はありませんでした。

もう誰が何と言おうと、父の如く法華經を信じ抜くのだ

父の遺言通りの人間になつてみせるのだ  
父の恩に報ゆる道は、これ以外にない  
へたとえ如何なる抵抗や嘲笑にあっても、

それは曾つて私が犯した誘法の報いとして受取ろう。如何なる誰にも屈せず堪え抜いて行こう。そして父の臨終の時に触れるこの出来た、あの恐しいほど尊い法華經を一人でも多くの人々に伝えて行くのだ

私は天に向つて誓いました。絶叫するかの如くに・・・

晝う私のまぶたには、臨終最後の被那、つぶった眼より、とめどもなく流れる涙にぬれたさん然として輝く父の顔が、大きく写っていました。

以下次号

## 編集後記

☆秋深く、身延の全山も紅葉し始めました。一般雑誌は既に十月号を出しているとのうのに、本誌はやっと八月号を出す始末です。

読者皆様には何とお詫びしてよいやら言葉も知りません。☆毎号のようく発行遅延をお詫びしつゝ今度こそはと意気込んでいましたのに、身延山大学三年生は全員、一ヶ月間、身延中学に於ける教育実習にたずさわり、日高上人は夏期街頭布教がドツと出て字を読むことも私信すら書く事も出来ない状態が続き、おまけに九月十六日は本妙庵入仏式、追われ通しでした。

☆八月号と九月号の合併号を出す案もありましたが、年内に正月号まで毎号出す事に決定、大車輪で発行を定期にもどすことにしました。御寛怒を乞う次第です。

鷲峰

八月号

昭和三十九年 第二卷 第八号

通巻 第十四号

定価 五十円

昭和三十九年七月二十日 印刷  
昭和三十九年八月一日 発行

編集兼发行人

日高白象

印刷所 甲府市中央二丁目五一二三

天野賛写堂

発行所 山梨県身延町身延山久遠寺内

身延山鷲峰会

電話(身延山)二番・三番

振替(甲府)二〇九三番

誌代 半年分 三〇〇円(元共)  
一年分 六〇〇円( )

鷲峰贊助会費

一年 三〇〇〇円(分納可)